

インド思想史学会 第 30 回 (2023 年度) 学術大会のご案内

インド思想史学会会長 赤松明彦

インド思想史学会第 30 回学術大会を下記の通り開催いたします。皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日 2023 年 12 月 23 日(土)

対面による現地開催を主とし、オンライン(Zoom)を併用します。オンライン参加者は、事前の参加申込が必要です。申込方法はメール連絡または学会ウェブサイトを参照ください。

会 場 京都大学文学部校舎2階第7講義室
(理事会 11:00 - 11:40 京都大学文学部校舎2階第7演習室)

参加受付 12:30 から 京都大学文学部校舎2階第7講義室前
参加費: 1,000 円 (懇親会は開催いたしません)

※ オンラインは参加無料です。12:30からZoomを開場します。なるべく早めに入場ください。

研究発表者および発表題目

- 13:00 - 13:50 伊澤 敦子 (中央大学兼任講師/東京大学非常勤講師)
「Agnicayana 最上層(第5層)の先に見える景色
—煉瓦積みの総仕上げに関する各派の記述—」
- 13:50 - 14:40 Bill Mak (Fellow, Jao Tsung-I Petite Ecole,
University of Hong Kong)
“Nakṣatrakarmaguṇa of the *Gārgīyajyotiṣa* — The Oldest Extant
Source on the Indian Lore of Nakṣatras According to Vṛddhagarga”
- 14:40 - 15:30 菊谷 竜太 (高野山大学文学研究科/文学部准教授)
「インド密教注釈文献の傾向と構造—アバヤーカラグプタ『アーム
ナーヤマンジャリー』冒頭部を手がかりに—」
- ~~~~~ 休憩 ~~~~~
- 15:50 - 16:40 酒井 真道 (関西大学文学部教授)
「再考ラトナーカラシャーンティのAntarvyāptisamarthana」
- 16:40 - 17:30 志田 泰盛 (筑波大学准教授)
「虚空の視覚的表象と知覚可能性
—視覚外送説における空間定位論—」
- 総会 17:30 - 17:50 引き続き同会場(第7講義室)、同URL(Zoom)で

Association for the Study of the History of Indian Thought

Programme of the 30th Annual Conference

AKAMATSU, Akihiko President

The 30th annual conference of the Association is to be held as follows. We will cordially invite you to the conference.

Date and Time: 23 Dec 2023 (Sat.), from 13:00

Board Meeting: 11:00 — 11:40 (Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Seminar room 7)

Method: Face-to-face meeting/Online meeting by Zoom
(Those who wish to participate online are asked to pre-register.
For registration, please consult the follow-up email or our website.
The conference room and Zoom meeting are open from 12:30)

Venue: Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Lecture room 7

Programme

13:00 — 13:50 IZAWA Atsuko (Part-time lecturer, Chuo University/University of Tokyo)
“The final form of the highest (the fifth) layer of the Agnicayana”
[in Japanese]

13:50 — 14:40 Bill MAK (Fellow, Jao Tsung-I Petite Ecole, University of Hong Kong)
“Nakṣatrakarmagaṇa of the *Gārgīyajyotiṣa* —The Oldest Extant Source
on the Indian Lore of Nakṣatras According to Vṛddhagarga”

14:40 — 15:30 KIKUYA Ryuta (Associate Professor, Graduate School/ Faculty of Arts and
Letters, Koyasan University)
“Aspect and Structure of Tantric Commentaries in Later Indian Buddhism”
[in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

15:50 — 16:40 SAKAI Masamichi (Professor, Faculty of Letters, Kansai University)  
“Ratnākaraśānti’s Antaryvāptisamarthana Reconsidered” [in Japanese]

16:40 — 17:30 SHIDA Taisei (Associate Professor, University of Tsukuba)  
“The Visual Representation and Perceptibility of Ether (*ākāśa*-): The Theory  
of Localizing Objects in the Paradigm of Extramissive Visual Perception”  
[in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

Plenary Meeting 17:30 — 17:50 (Continued in the same room/Zoom meeting)

Agnicayana 最上層（第5層）の先に見える景色

—煉瓦積みの総仕上げに関する各派の記述—

伊澤敦子

(中央大学兼任講師・東京大学非常勤講師)

まず最初に、Agnicayana 全体の内容を細かく区分し、各テキストの対応箇所を一覧表にまとめたものを提示する。各派の対応の仕方や記述順については、概ね一致しているように見えるが、第4層に関してはテキストの対応の仕方が明らかに特殊であり、第5層の後半以降は必ずしもきれいに対応しているわけではない。第4層については既に発表済み（第14回 World Sanskrit Conference 2009年京都）であるので、今回は扱わず、第5層に焦点を絞る。

この第5層は Agnicayana 最上層であり、その煉瓦積みの終了をもって火祭壇の全体像が見えるはずなのだが、第5層自体がどのような形で終わるのが判然としない。例えば、黒 Yajurveda の Maitrāyaṇī Saṁhitā (MS) においては、第5層に積まれる煉瓦の記述は *chandsyā* (韻律煉瓦) と *ṛtavyā* (季節煉瓦) までで、5層構造についての解釈などが混在しており内容に連続性がない。それに対して、Taittirīya-Saṁhitā (TS) や白 Yajurveda の Śatapatha-Brāhmaṇa (ŚB)、各 Śrauta-Sūtra には *chandsyā* 以後も更に多くの煉瓦の名前が挙げられ、更に、*ṣaṣṭhī citi*, *gārhapatya*, *punaściti*, *gociti* などの名称が言及される。この *citi* は第1層第2層の層に当たる単語だが、この場合は煉瓦のグループと言うほどの意味とも考えられるが、*ṣaṣṭhī citi* となるとやはり第6層と取るべきであり、形はどうあれ意識的には第5層の上の層を想定していると考えられる。更に *gārhapatya* と *punaściti* に至っては、実際に第5層の上に置かれる煉瓦たちである。

本発表では、まず当該部分の各テキストの記述を基にそれぞれの第5層の完了形をできる範囲で明らかにする。更に、時代と共に積む煉瓦の数が増えていき第5層の形状が複雑化していったと結論付けられるかどうか、またもしそうなら、そうなった理由が願望の増大や競争心の発露といったものとの関係するのかどうかを検証する。

Nakṣatrakarmagaṇa of the *Gārgīyajyotiṣa* —
The Oldest Extant Source on the Indian Lore of Nakṣatras According to Vṛddhagarga

Bill M. Mak

Jao Tsung-I Petite Ecole, University of Hong Kong
Needham Research Institute, Cambridge

The *Gārgīyajyotiṣa*, dated generally to the first century CE, is a Sanskrit work of sixty-four chapters thought to contain some of the oldest Indian astral materials extant. In the first chapter titled Karmagaṇa, the astral lore pertaining to the four time divisions: *tithi*, *nakṣatra*, *muhūrta*, and *karaṇa* is described. An analysis and a comparison of the section on the *tithi*-s with the extant Indic *jyotiṣa* materials preserved in the Chinese Buddhist canon, in texts such as the *Śārdūlakarṇāvadāna*/**Mātaṅgasūtra* (摩登伽經／舍頭諫太子二十八宿經) and Amoghavajra's *Xiuyao jing* (宿曜經), reveal a common core of astral materials that was once popular in India before it was gradually supplanted by a new variety of astral science characterized by planetary movement and horoscopy sometime during the middle of the first millennium. In this paper, I will focus on the materials connected to the Indian lore of *nakṣatra*-s based on a new edition of the section of Nakṣatrakarmagaṇa attributed to Vṛddhagarga in the first chapter of the *Gārgīyajyotiṣa*. Among the salient features of these materials are the description of the number of stars in each *nakṣatra* and the reference to their late-Vedic and pre-Hindu content such as deities and rituals. Furthermore, the absence of Abhijit in this early twenty-seven *nakṣatra* system may provide us further insight into the early evolution of the Indian astral system and reasons that may account for the variation between the twenty-seven and the twenty-eight *nakṣatra* systems.

インド密教注釈文献の傾向と構造

—アバヤーカラグプタ『アームナーヤマンジャリー』冒頭部を手がかりに—

菊谷 竜太

(高野山大学 文学研究科/文学部准教授)

一般的に、仏教において「広注 (ṭīkā)」は「逐語釈 (pañjikā)」と同義であり、基本的に「逐語釈」は本文をすべて網羅するが、両者に共通しているのは注釈する対象以外の引用をも数多く含む点にある。すなわち、①ṭippaṇī, ②ṭīkā, ③nibandha, ④pañjikā, ⑤paddhati, ⑥vivarāṇa, ⑦vivṛti, ⑧vṛtti, ⑨vyākhyā, ⑩bhāṣya, ⑪vārttika というこれら一般的に「注釈」に相当しうる語のうち、⑩⑪は密教には見出されず顕教あるいは他のヒンドゥー諸派の間で用いられ、②⑦は比較的長く、①④⑧は比較的短い傾向にあるものの、密教においては②④はしばしば同義語として用いられる (Isacson & Sferra [2015])。

本発表では①に該当するアバヤーカラグプタ (11 世紀頃) によって著述された密教百科事典的注釈書『吉祥サンプトードバヴァタントラ広注「アームナーヤカルパドゥルマンジャリー」』*Śrīsaṃpuṭodbhavatantraṭīkā-Āmnāyakalpadrumañjarī* を取り上げる。同書が引用する典籍についてはすでに苦米地 [2017, 2018ab] によってまとめられているが、本発表では冒頭部における記述に注目し、アバヤーカラ自身の手による他の注釈文献・ブッダカパーラタントラ注『無畏注』*Abhayapaddhati*, ならびに『アームナーヤマンジャリー』に先行すると考えられるインドラブーティ注 (東北 1197, 大谷 2327) ・ヴィールヤヴァジュラ注 (東北 1199, 大谷 2329) をも射程に入れ、注釈の冒頭部分を相互に対照することによって、インド密教注釈文献がもつ傾向や構造についてさらなる理解を深めたい。

再考ラトナーカラシャーンティの Antaryvāptisamarthana

酒井 真道

(関西大学 文学部 比較宗教学専修 教授)

インド仏教論理学史の掉尾を飾る、ラトナーカラシャーンティ (ca. 970-1030) の小著 Antaryvāptisamarthana は、仏教論理学研究黎明期の Satkari Mookerjee や梶山雄一、御牧克己らによって仏教論理学の遍充理論の最終段階に位置する作品として注目された。彼らは本作においてインド仏教論理学は最終的にその帰納的性格を脱したと理解する。そして、論理学上の理論の発展という観点から彼らは、論理学史上のクロノロジーとしては、密教学史上のそれとは異なり、ラトナーカラシャーンティはジュニャーナシュリーミトラ (ca. 980-1040)・ラトナキールティ (ca. 990-1050) 師弟の後に位置すると理解する。同師弟は外遍充 (bahirvyāpti) の立場を取るからである。このクロノロジーに対しては谷貞志が異論を唱え、Antaryvāptisamarthana は、少なくともジュニャーナシュリーミトラの Kṣaṇabhaṅgādhyāya には先立つと主張する。

Mookerjee らの時代以降、ダルマキールティ (ca. 550-650) からラトナーカラシャーンティに至るまでの時代に属する仏教論理学者たち——アルチャタ (ca. 730-790) やダルモータラ (ca. 740-800)、シャーンタラクシタ (ca. 725-788) やカマラシーラ (ca. 740-795)、プラジュニャーカラグプタ (ca. 750-810)、ドウルヴェーカミシュラ (ca. 970-1030)、ヤマーリ (ca. 1000-1060)、モークシャーカラグプタ (ca. 1050-1292) ら——の遍充に対する考え方が個別的に解明されてきた今、Antaryvāptisamarthana は、その思想史上の位置が再検証されるに相応しい時期を迎えている。就中、その再検証を我々に強いるのは、ジターリ (ca. 940-100) の新出の著作 Kṣaṇabhaṅgasiddhi である。本作の冒頭でジターリは、「刹那滅論者たちは、内遍充論か外遍充論かの区別に応じて、二種である」と明言し、バッタ・アルチャタとアーチャールヤ・ダルモータラをそれぞれに配置する。

本発表では、前半部にて、諸先行研究の成果をまとめつつ、ジターリの Kṣaṇabhaṅgasiddhi が、Antaryvāptisamarthana の再考を我々に促し、我々は後者をインド仏教論理学の思想史に新たに位置づけ直す必要があることを論じる。このことは、我々は、ジターリの Kṣaṇabhaṅgasiddhi において内遍充論、外遍充論としてそれぞれ提示される理論と、Antaryvāptisamarthana における立論者説と対論者説とを比較検討し、それらの内容と関係とを明らかにせねばならないことを意味する。

その Antaryvāptisamarthana の研究は、これまで梶山の独壇場であり、とりわけ 1999 年に出版された、チベット語訳の校訂テキストが付され、科段分けが施された、サンスクリット校訂テキストとその英訳研究——Kajiyama, Yūichi. *The Antaryvāptisamarthana of Ratnākaraśānti*. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica II. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology. ——が本作の研究の世界的基準となっている。しかし、梶山自身が述べるように、彼の文献学研究の手法は全く問題なしとは言えない。本発表の後半部では、梶山による文献学研究の問題点を指摘することによって、Antaryvāptisamarthana のテキスト研究を、その内容理解も含め、見直す必要性について論じる。

虚空の視覚的表象と知覚可能性——視覚外送説における空間定位論——

志田 泰盛

(筑波大学 准教授)

本発表は「目に見える虚空」を主題とする。虚空 (*ākāśa-*) は、ヴァイシェーシカ派の標準的な範疇論体系においては、五元素の一つとして、また、空間を遍満する単一の実体として、その実在性が措定されている。一方、有部アビダルマ以降の仏教諸派の五位ベースの法の体系においては、虚空は無為法の一つとして列挙されるが、その実在性／非実在性や経典由来の「空界 (*ākāśadhātu-*) 」との異同をめぐり、仏教内部で異論が見られる。

虚空の実在性を容認する学統の間では、その認識根拠をめぐる諸説が確認される。また、古典インドの哲学的・文芸的諸作品における虚空の色彩表現は、錯誤的表象とされるケースも含めて様々に描写されるが、大きくは①無色透明、②白色・明色系、③青色・暗色系という三系統に分類できる。

以上を踏まえた上で、本稿の主題の焦点を「譬喩表現ではない実体名詞の指示対象としての実在的な虚空の視覚的表象と知覚可能性」に絞る。主に扱う一次資料として、Sucarita Mīśra (後 10 世紀頃、以下 Sucarita) による *Ślokavārttikakāśikā* (ŚVK) を取り上げ、〈虚空の知覚可能性〉が論じられる箇所、および、その附論となる〈闇 (*tamas-*) の本質〉をめぐる議論を分析し、議論の構成・定説・対抗説・題材について、古典インドにおける位相、とりわけ、ヴァイシェーシカ派の標準的理論との差異を浮き彫りにすることを目指す。

Sucarita は〈飛ぶ鳥の空間定位〉を〈虚空の知覚可能性〉の論拠とする。飛ぶ鳥の観察という題材自体は、古くは有為の空界の定義的特質とする一説として『新婆沙論』に記録される他、Maṇḍana Mīśra (後 8 世紀頃) の *Bhāvanāviveka* における行為／運動の知覚可能性と生成作用 (／生じさせる働き／現実化の働き, *bhāvanā-*) の有無をめぐる議論、あるいは、Śāṅkara (後 8 世紀頃) の *Brahmasūtra* 註における虚空無為にかんする仏教説批判などに遡ることができる。それにたいして、Sucarita の議論の新奇性は、〈鳥の空間定位〉という題材を、暗所環境下の蛍や明所環境下の影などを視覚目標とした空間定位論一般へと拡張した上で、〈虚空の知覚可能性〉の論拠としている点にあるといえる。

さらに、ŚVK の議論の構成上、〈虚空論〉の過半量を占める〈闇論〉は、〈虚空の知覚可能性〉を論じる箇所に挿入されたことが推定されるが、なぜ、浩瀚な闇論をこの箇所に挿入する必要があったのかという点も含め、空間定位論と闇論との関係についても検討を加える。